

AI授業 生活用

AIは思考を深めるパートナー

(上)

日本高等教育開発協会の協力を得て、本紙が募集した「生成AI活用授業事例」に対し、このたびは17大学から24の先進的事例が寄せられた。これらの事例から4事例を選定し、同協会の会員に取材してもらった。本欄では上下に分けて紹介する。このたびの事例の共通するのは、まず第1に、AIを「学びの伴走者」として位置づけていることだ。帝京大学では、講義資料や過去問を学習させたAIが、24時間いつでも学生の疑問に応じる環境を構築した。これにより、質問のハードルを下げ、学生の自律的な学習を支えるパートナーとなっている。第2に、授業準備の効率化とライブバックの高度化である。鹿児島国際大学は、学生の興味を引く導入案や具体例の作成にAIを活用し、準備の質を高めている。また東京電機大学では、AIで膨大な提出物を分析して議論の傾向を学級新聞として還元し、大人数授業での丁寧な指導を実現している。最後に、AIの限界を理解し、アナログの価値を再定義することだ。尚絅学院大学は、推敲にAIを用いる一方で、構想段階では手書きやフィールドワークといったアナログな体験を重視している。AIの流暢さゆえの誤認やバイアスを批判的に吟味するリテラシー教育も、活用の大前提となる。AIを単なる効率化ツールではなく、思考を深化させる協働的なパートナーとして組み込むことが、新時代の教育の鍵となるだろう。なお、応募された事例については、今後、番号に分けて一部を紹介していく。

協働的なパートナーとしての 生成AI活用

東京電機大学 人間科学科目「科学と技術の社会史」ほか

東京電機大学のいくつかの科目で田中浩朗教授が生成AI(以下、AI)の導入を本格化させた背景の1つには、教養科目特有の構造的課題があった。田中教授によると、担当する「科学と技術の社会史」および「先端技術と社会問題」は、2科目で6クラス、計約600人の履修者がいるため、学生が提出する課題は週に1000件を超えることもある。従来から提出物の一部を探り上げ、授業冒頭で紹介しながら講評するのには限界があったが、目についたものを探り上げるといった限界は避けられない。常々、より丁寧なフィードバックしたいという思いを抱えていた。また、大人数の受講生、

特に積極的に質問してくるわけではない多くの学生に対する指導や支援も課題としていた。これらの課題に対する解決策の1つとして、田中教授はAIを活用した授業実践を進めている。

学生のAI活用・AIパートナーによる学習支援

授業の特徴は、AIを単なる答えを出す装置としてではなく、学びのパートナーとして学生に提示している点にある。AIパートナーと名づけたのは、AIが人間を代替するという印象を避け、学びを促す伴走者として位置づけるためであるという。授業では、学びを対話型へと転換することを目的として、AIの利用プロセスを明確化させることで、「丸投げ」を抑制し、学生の主体性を保つようしている。



授業アンケートによると9割以上の学生がAIを活用し、毎週利用する学生も7割に達する。ほとんどの学生がAIの学習支援効果に肯定的である。AIパートナーとの対話を踏まえて自分の考えを言語化する学生が増え、提出物の質にも変化が見られるようになった。

習週の授業冒頭でそれを示し、自分の意見が全体のどこに位置づけるのか、どこに論点があるのかなどを学生が理解できる資料としている。学級新聞を基に、ディスカッションの回では、もう一段深める問いを投げかけるなど学習の深化にも役立てている。AIモデルは用途に応じて複数試しており、今回の事例ではClaudeを使用している。AIが学生全体の声を捉えたいという理由で提出が滞る学生が減少した。さらに、匿名で教員に質問できるコーナーを作っても質問がほぼ来ない一方で、AIなら気軽に質問できるため、質問への敷居を下げて、能動的な学習へとつながっている。AIは学習の代替ではなく、理解促進や論点の発見を助ける支援装置として浸透しつつあり、そのことが学生の行動変容として現れ、学習の質に良い変化が生じていると感じている。

アナログとデジタルを大切に ライティング授業

尚絅学院大学 専門教育科目「Academic Writing I・II」

尚絅学院大学の「Academic Writing I・II」は、人文社会学類の英語インテンシブコースに配置された専門教育科目である。2〜4年次生が毎年5〜15人程度受講している。本科目にもある「ライティング」教育は、生成AI(以下、AI)の普及によって大きな影響を受けている。授業課題をフロントとして入力してしまえば、AIが回答を示してくれるため、成果物の評価のみでは学生の学習成果を適切に測定したとはいえない時代になった。科目担当のパトリック・カナウェイ准教授は、AI

「Academic Writing I・II」は、前期・後期の1年間を通じて「プロセス・ライティング」を学び、最終的には1500〜2000文字のマ

「書く過程」を重視する指導法で、学生の主体性を育むうえで有効な方法とされる。前期の「Academic Writing I」では、AIやパソコンといったデジタルツールを使わず、授業中に紙とペンを駆使してアイデアを出し、構想を練る。この学生が書いたものに教員もフィードバックをする。これを繰り返すことで、学生もデジタルツールに頼らずに自分の頭で考えられるようになっていく。さらに、教員も、学生のベールンクは、アイデア出し、アウトラインの作成、下書き、推敲といった一連



実際のフィールドワークの様子

後期の「Academic Writing II」でも、いきなり文章を書き出すことはしない。後期の前半はフィールドワークに時間を費やす。たとえば、今年は大学の近くに秋保温泉をフィールドとして、インバウンド客に対して情報発信をしていくためにどうすればよいかを考えるための取材をした。Xモや写真や動画をたくさん撮ることや、「本当に伝えたいこと」をまずは見つける。これがなければ本当の意味で、主体的に学び、書

教育設計を示唆しており、人間が行うべき思考過程をどう考え、強化するかという視点から教育の未来を再定義している。

田中教授は、AIを人間の代替ではなく、人間の思考を支える協働的なパートナーと考えている。そして、AIには大きな思考の核心部分を人間が担い続けることが重要であると強調する。こうした考え方を具体的な授業設計として提示している点に、本事例の特徴がある。

今回の取材は、AI時代の授業では学生同士で話し合う時間も確保されていたため、学生の不満は解消された。

この経験から、カナウェイ准教授は「時間を気にせず、恥ずかしい思いを恐れずに相談できるのはAIで、学習を楽しみ前に進むためのモチベーションを維持するのは周りの人間である」というAIと人間の役割分担の大切さを改めて認識したと語る。

生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしていると語る。AI時代だからこそ、自身が語れる素材について体験を通じて収集すること、書くために必要な過程を体験を通じて理解すること、という、アナログな学習経験を大切にしている。

そして、AIを「脅威」ではなく、「非脅威」で即時性の高いピア・レビュー」と位置づけ、人間との対話と共にAIを活用する力そのものを高める授業展開を設計している。教員自身が楽をする、あるいは学生に楽をさせるためにAIを使用する授業ではない。AI時代だからこそ本場に必要な学習目標と経験は何かを問い直し、AIと人間の役割分担を検討して生まれた、まさに新時代のライティング教育の1事例といえるのではないだろうか。(京都橋大学 西野毅朗)

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。

また、カナウェイ准教授は、AI時代におけるライティング教育において「観察可能な過程を大切にすること」と「AIを補助的に歓迎すること」という2つの原則を大切にしている

また、生成AIに依存して学んでいたのでは到底書くことができないが、本科目の受講生たちは1年間のプロセス・ライティングの積み重ねと、AIを活用した即時フィードバック体験の両方の結果、ほとんどの学生が十分な構成と内容のエッセイを書き上げる。